

令和6年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

百年の伝統と実績の上に立ち、グローバル社会において真のリーダーとして世界に貢献できる人物を育成する学校。
◎ 基礎から発展まで「生徒が思考する授業」、「力のつく授業」を展開し、3年間を見通した進路指導により生徒の希望進路を実現する。
◎ 日々の授業、行事、国際交流を通して、「自主・自律」を体現する生徒を育てる。
◎ 地域に信頼され尊敬される品格と豊かな国際感覚、人権感覚を有する生徒を育てる。

2 中期的目標

世界に貢献できる人物を育てるため、生徒につけたい力を定め、その実現へ向けた取組みを行う。
【5つのつけたい力（Five Sumiyoshi Qualities）】
1 将来を見通せる深い洞察力と世界を見据えた視野の広さ
2 異文化を受け入れることのできる包容力と人権感覚
3 理念を行動に移せる実行力と他者と共に取り組む協働力
4 世界で通用する語学力とコミュニケーション能力
5 柔軟な発想と探究心により課題を発見し解決する力
1 学力向上と進路実現
(1) 生徒の自己実現を図るための学力、体力、気力の育成
ア 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を推進する。
イ 3年間を見通した進路指導を着実に実行する。
※ 国公立大学合格者100名以上（R3 67名、R4 76名、R5 60名）
2 国際・科学高校としての質的な深化
(1) 国際文化科と総合科学科のさらなる進化・発展
ア 両学科が共に取り組む課題研究を深化させる。
イ ルーブリック評価によって生徒の思考力、表現力等を向上させる。
(2) 世界で通用する語学力とコミュニケーション能力の育成
ア 授業や行事を通じた「使える英語力」をさらに向上させる。
イ 対面とオンラインを有効に活用し、国内外の高校生と交流を深める。
(3) SSH、ユネスコスクールの取組みの充実
ア ①課題研究の質的向上 ②国際共同研究 ③小中高大・産学連携 ④卒業生による「住高支援ネットワーク」を充実させる。
イ ユネスコスクール加盟校として平和学習、人権学習を充実させる。
※ 学校教育自己診断「命の大切さや社会のルールについて学ぶ機会がある」90%以上を維持する。（R3 93%、R4 93 %、 R5 94%）
3 地域で信頼され尊敬される品格と豊かな国際感覚、人権感覚の育成
(1) 人権を尊重する意識の向上
ア 人権HRをさらに充実させるとともに、研修や情報共有を通して教員の見識を高め、きめ細かな相談支援体制を確立させる。
(2) 生徒の自主的な活動の充実
ア 自治会活動、部活動をさらに充実させる。
(3) マナー・規範意識等の育成
ア 挨拶・清掃・遅刻指導を通して、生徒が自らマナーや規範について考える機会を与える。
※ 学校教育自己診断「人権について学ぶ機会がある」90%以上を維持する。（R3 95%、R4 96%、 R5 95%）
※ 学校教育自己診断「学校行事には楽しく参加している」90%以上を維持する。（R3 95%、R4 96%、 R5 97%）

【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析〔令和6年12月実施分〕	学校運営協議会からの意見
【教育活動】評価については生徒の肯定的評価が今年度93%と昨年並みであったが「授業はわかりやすく興味深い」が昨年度より5ポイント下がり85%となった。苦手意識のある科目によるものかと推測する。「1人1台端末の活用」は77%と若干上昇。 【学校生活】「困っていることには真剣に対応してくれる」は93%、「担任以外に気軽に相談できる先生がいる」が78%と昨年とほぼ同じ結果。「学校の指導は適切である」は生徒89%、保護者90%「人権について学ぶ機会がある」,「命について学ぶ機会がある」は生徒94%,91%,保護者93%,89%で、いずれも昨年とほぼ変わらない結果であった。(生徒)「課題解決に向けて自分から取り組んでいる」89%,「人と違う意見を尊重できる」98%,「他の人と協力し合える」97%とほぼ昨年並みで探究心と協働する姿勢が高い。 【その他】「学校の施設・設備は、学習環境面で満足できる」は生徒83%、保護者73%で数値は上がらない。引き続き設備の整備・改善が課題である。また、「社会貢献活動に関わることは大切だと思う」(生徒)96%,「地域や社会がよくなること	第1回令和6年6月20日実施 ・国際的な活動が急激に増加、様々な苦労があると予想する。生徒にとって学びになる行事がたくさんあるのはよいが、相手方に失礼にならないように、持続可能な状態で取り組んだほうがいいのでは ・SUKIPROのこれまでと今回のウリは何か？問題へのアプローチに対してはエビデンスと科学的視点で説得力が必要→スーパーサイエンスは総合科学科のみが、理系の分野の中でチームをつくっていたSUKIPROは分野を問わない、好きな、関心のある分野をテーマにしている ・中学校のときは、クラスに数人いたが、不登校は高校でも問題になっている？ →人間関係で悩んでいる生徒や不登校になればいいなという生徒はいるので教育相談と協力しながら対応していきたい ・持続可能な取組みに向けて、どのように取り組むと生徒がどのように成長していくのかというロジックが意識化する必要があるのではないか ・授業公開で何を学んだかが大切なので、公開の回数を指標の一つにしたほうがいいのでは？ ・学校の取組みの発信が地域の中学生に魅力を伝えるポイント。どのような対策をしているか？→①こども天文教室（保護者や子どもがたくさん参加）②学園祭の金曜日に近隣の小学生を招待するなどを企画。また、今年度は探究フェスティバルに中学生を招待して、発表してもらう機会をつくる。学校説明会や中学校への出前授業も実施。 ・発信を自治会等の生徒にさせてみては？→各顧問の許可を得ながら、SNSなどで生徒が公開している部活動もある 第2回令和6年10月11日実施 ・海外研修がかなり多い・危機管理で注意した方がよかったことは？→言語面は問題ない。航空券が高く経由便でないと予算を越える、引率経験がある教員よりノウハウを共有 ・情報が共通テストに入ってくる データの分析講座をやっているのは共通テストも踏まえているのか→自分たちの意見を客観性という意味で伝わりやすいようにする目的でやっている ・保健室来室者が令和2年度から増加傾向、来室する生徒とその相談内容について→頻繁に保健室に来る生徒もいる。内容は保護者と

府立住吉高等学校

に取り組んでいる」(生徒) 78%と高く、本校がめざす生徒の資質として評価できる。 (教職員)「教育計画の作成に当たって教職員で話し合っている」74%、「教育活動全般にわたる評価を行い、次年度の計画に生かしている」76%と低い。日ごろの活動を教職員間で振り返る機会の確保が必要である。そのほかの項目は高く、教育活動において「生徒や保護者の願いにこたえている」「海外の生徒に対し、支援する体制がある」は回答者全員が肯定的意見であった。今後も各担当部署を中心に生徒の支援に尽力する。	の関係、友人関係など。 ・国際科学高校として教科横断型などの評価の基準をどのようにきめるのか、チームで取り組んでいるからこそ、共有していく必要があると思った。新しい試みに取り組んでみたらいいのではないかと思う・AI を利用したりするのか？ →AI の利用はしていない(端末の権限あり) 上手く使えるのか不安(頼りきろうとする傾向は強い) 精査せずに使うのを指導していかないといけない ・モチベーションの高い生徒をどうやってつまづきを見守りながら支援していけるのが大事。高校が中学校のように生徒を支えるというような発想で指導していけば、それも強みになるのではないか。 ・特色ある魅力がある中で、武器や強みになり、出口につながるのでは？ ・今のたくさん魅力をどうやって発信？→HP をリニューアル SNS で魅力発信 情報を更新 ・虐待の件について どこまでで危機と判断するのは難しい。本人が SOS を出してきた生徒は助けるべき。あらゆるケースを想定しながら取り組んでいく必要がある 第3回令和7年2月13日実施 ・令和7年度の目標、情報共有・発信は具体的にどのようにしているか→SSH 事業の成果普及が必要。公立高校の魅力を発信する。説明会では高校生が発表、近隣学校を招待して、取組みを紹介。ブログなどの SNS での情報発信。探究活動での資料なども含めてすべて発信公表。 ・カリキュラムオーバーロード状態と働き方改革の兼ね合いはどうか。ユネスコスクールと SSH の取組みで重なっている内容もあるのではないかと考える→学科によって単位数が異なっていた「総探」を統一。すべての研修を両学科の生徒が参加できるようにしている。 ○共通テスト科目に「情報」の追加の影響は→今年度は読めばわかるような問題もあったが、専門的な知識が必要な問題となるなら対策も早める。 ○外部の来客がある中で変化したということだが、探究フェス以外の例は？ →緊張感があったのか、これまでの会とは雰囲気は違っていた。来客のないときにもできればいい
---	--

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標[R5年度値]	自己評価
1 学力向上と進路実現	(1) 生徒の自己実現を図るための学力、体力、気力の育成 ア 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善の推進	ア・STEP UP LABO（授業力向上チーム）が中心となって公開授業を通した授業力向上に取り組む。 ・ICT 推進委員会が中心となって1人1台端末の体制を整備し、タブレット端末を活用した公開授業を実施する。 ・働き方改革の取組みとして、部活動指導に関する方針を遵守し、業務の効率化を図り、教員の業務の平準化を促進する。	ア・公開授業週間を年に2回以上設定し、個々の授業改善に努める。[2回] ・授業アンケート「授業内容に興味・関心を持つことができた」「知識や技能が身に付いた」3.3以上を維持する。[3.4、3.5] ・学校教育自己診断（教員）「各年度の教育計画の作成に当たって、教職員で話し合っている」を80%に[74%] ・学校教育自己診断「1人1台端末を効果的に活用している」80%に [75%] ・時間外勤務時間（一人当たり平均）を5%減少させる。[288時間で1%増（4月～2月）] ・年間時間外勤務時間月平均60時間を超える教員を5名以内に作る。	公開授業は年間3回実施。授業アンケート「授業内容に興味・関心を持つことができた」3.57「知識や技能が身に付いた」3.58（◎） 学校教育自己診断（教員）「各年度の教育計画の作成に当たって、教職員で話し合っている」74%（△） 学校教育自己診断「1人1台端末を効果的に活用している」77%（△） ・時間外勤務時間（一人当たり平均）が5%減少（4月～3月）（○） 月平均60時間を超える教員は3人（4月～3月）（○） 進路関係 HR8回 進学講習3年生24講座、2,1年生7講座（△） 模擬試験後の分析会5回実施（○）
	イ 3年間を見通した進路指導	イ・進路指導部が主導し、学年団と連携の上、3年間を見通した進路指導を実施する。 ・進路指導部が学校全体で調整、策定した進学講習を系統的に実施する。 ・模擬試験後、進路指導部と学年団が連携して分析会を実施し、模試の有効活用を促進する。	イ・系統的な進路 HR を5回以上実施する。[8回] ・進学講習を3年生は20講座以上[24講座]、2、1年生は15講座以上[20講座]実施する。 ・模擬試験後の分析会を5回以上実施する。[5回]	
2 国際・科学高校としての質的な深化	(1) 国際文化科と総合科学科のさらなる進化 ア 課題研究の内容の深化	ア・R6年度からの教育課程改定により、両学科が同時に「総合的な探究の時間」の活動をする。 ・探究サイクルを一般教科等に取り入れ、課題解決型の授業を実施する。	ア・国際文化科1・2年生の「総合的な探究の時間」で課題研究を実施し、その発表会を年間各学年1回以上実施する。[2回] ・探究サイクルを取り入れた教科の公開授業または事例報告を年間2回以上実施する。[2回]	発表会を年間各学年3回（○） 探究サイクルを取り入れた課題解決型の授業は0回。個人での授業内で一部工夫するにとどまる。校内での積極的な情報共有が必要。（△） 学校教育自己診断「学習の評価は納得できる」93%（○） 学校教育自己診断（教員）「評価の在り方について、話し合う機会がある」80%（△）
	イ ルーブリック評価の普及	イ・SSH の課題研究で用いているルーブリック評価を普及させるとともに、評価についての研究を進める。	イ 学校教育自己診断「学習の評価は納得できる」90%以上を維持する。[95%] 学校教育自己診断（教員）「評価の在り方について、話し合う機会がある」を90%に。[80%]	
	(2) 世界で通用する語学	(2)	(2)	

府立住吉高等学校

	力とコミュニケーション能力の育成 ア 授業や行事を通じた「使える英語力」のさらなる向上 (3) SSH、ユネスコスクールの取組みの充実 ア 課題研究の質的向上、国際共同研究、「住高支援ネットワーク」の充実 イ 平和学習、人権学習の充実	ア・暗誦、ディベート等の指導やSE（スーパーイングリッシュ）、SK（スーパーコリアン）等の授業、英語合宿、スピーチコンテスト等の行事を引き続き系統的に実施する。 (3) ア・海外の高校との国際共同研究やオンライン交流を広げる。 ・「住高支援ネットワーク」の人数を増やし、課題研究の助言の活用を進める。 イ・SDGsをテーマとした「総合的な探究の時間」、ユネスコスクール行事等を中心に平和学習、人権学習を充実させる。	ア・1年生70人以上、2年生で100人以上がCEFR B1以上となるようにする。[1年生90人、2年生70人] (3) ア・国際共同研究を実施し、年間1回成果発表会を実施する。[1回] ・「住高支援ネットワーク」の活用を年3回以上[3回] イ・学校教育自己診断「命の大切さや社会のルールについて学ぶ機会がある」90%以上を維持する。[94%]	ア. CEFR B1以上 1年生91人、2年生98人。2年生は目標までとわずかであったが、1年生では大幅に上回った。(○) (3) ア. 国際共同研究を2月に実施「住高支援ネットワーク」の活用3回(○) イ. 学校教育自己診断「命の大切さや社会のルールについて学ぶ機会がある」91%(○)
3 地域で信頼され尊敬される品格と豊かな国際感覚、人権感覚の育成	(1) 人権を尊重する意識の向上 ア 人権HRのさらなる充実ときめ細かな相談支援体制の確立 (2) 生徒の自主的な活動の充実 ア 自治会活動、部活動のさらなる充実 (3) マナー・規範意識等の育成 ア 挨拶・清掃・遅刻指導	(1) ア・人権教育推進委員会を中心として、人権HR及び教職員研修の一層の充実を図る。 ・支援委員会、帰国渡日生を支援するGL(グローバルライフ)委員会、教育相談会を中心に生徒の支援体制の全校化を引き続き行う。 (2) ア・自治会部を中心に生活指導部、学年団等と連携し、生徒が主体的に行う体育大会、学園祭等の行事やコンテスト等への参加を充実させる。 (3) ア・生活指導部を中心に学年団と連携し、遅刻指導、自転車等のマナー指導、挨拶指導等を通して、生徒が自らマナーや規範について考える機会をあたえる。 ・保健部を中心に学年団と連携し、定期清掃、大掃除時の取組みを強化する。また、定期的な換気や消毒により、校内の感染防止対策を行う。	(1) ア・学校教育自己診断「人権について学ぶ機会がある」90%以上を維持する。[95%] ・学校教育自己診断「担任以外にも相談できる先生がいる」80%以上にする。[78%] (2) ア・学校教育自己診断「学校行事には楽しく参加している」90%以上を維持する。[97%] (3) ア・学校教育自己診断「学校生活についての先生の指導は適切である」85%以上を維持する。[89%] ・学校教育自己診断「学校の施設・設備は、学習環境面で満足できる」85%以上に[82%]	ア・学校教育自己診断「人権について学ぶ機会がある」94%(○) ・「担任以外にも相談できる先生がいる」78%(△) (2) ア.「学校行事には楽しく参加している」96%(○) (3) ア.「学校生活についての先生の指導は適切である」89%(○) 「学校の施設・設備は、学習環境面で満足できる」83%(△)